

宝鏡三昧提唱

井上義光著

新版序

『宝鏡三昧』は、六祖下の正嫡六世洞山大師の真訣也。〔婆々和々。有句無句〕は西天の四七東土二三の心印にして絶古今の慈悲落草也。以て児孫の夷猶を助けんとす。菩提心は度衆生心なれば、その暖皮なお今に至って沙界に遍満し大光明を放つ。

嫡々遠孫八十三代芸州忠海少林窟道場中興開山洞天義光老大師ありて、這箇の一段〔如是之法。仏祖密附〕底の正法眼蔵を拈弄し『宝鏡三昧提唱』の一本となす。二師の直愛直血たるこの一梓は、一隻の眼をして読む時感応道交せざる者なし。只是れ如今直下の為人也。一千百余十年の暖皮肉は尊中の尊にして欣快の極み也。又寒毛卓立は報恩の基也。されど僅かに世に役して絶版となり果つるは恐惶の至りとなす。

慎んで惟みれば老大師遷化勾当して既に久し。師去って三十年に及ばんとす。涙を伝えるは只涙なれば、ここに版を新たにし再び〔不去不来〕の面目を現前せんとす。只是れ菩提心の真たるを期すのみならん乎。祖曰く、〔潜行密用。如愚如魯。只能相續。名主中主〕と。誰かその人にあらざる。咄。立卵の児孫、這裏玄枢に向かつて血盆空しく吠ゆれば、空山の満月水中に躍って魚腹に入る。参。蓋し、祖玄・幽雪の二禅哲あって是れ成る。此処に法の幸いを禄して感謝とせん。尚、老漢の仮名遣い等そのままとせりしは又如是の風光なり。抱道の眼睛裡底、諸仏と共に落所を知らず。

合掌

平成七年六月十五日

阪神大震災の年 一九九五年

弟子希道焼香百拜

序

義光老大師十三回忌に当り、かねて予定したる老師の『宝鏡三昧提唱』をようやくに公とすることを得

たり。

是れは是れ、只有語中の無語を看取するに非ずして何ぞや。

冀わくは、菩提心の本に冷暖自知して大法の那一人たれ。

或は若し、如是に非ざれば恨み千載に渡らん歟。

昭和五十五年六月十五日

老大師十三回忌命日に序す

照庵大智謹言

宝鏡三昧

如是之法。仏祖密附。 如是の法。仏祖密に附す。

汝今得之。宜能保護。 汝今之を得たり。宜しく能く保護すべし。

銀◆盛雪。明月蔵鷺。 銀◆に雪を盛り、明月に鷺を蔵す。

類而不齊。混則知処。 類して齊からず。混ずるときんば処を知る。

意不在言。来機亦赴。 意言に在ざれば、来機亦赴く。

動成◆白。差落顧佇。 動ずれば◆白を成し、差えば顧佇に落つ。

背触共非。如大火聚。 背触共に非なり。大火聚の如し。

但形文彩。即属染汚。 但文彩に形せば、即ち染汚に属す。

夜半正明。天曉不露。 夜半正明。天曉不露。

為物作則。用拔諸苦。 物の為に則となる。用いて諸苦を抜く。

雖非有為。不是無語。 有為に非ずといえども、是れ語なきにあらず。

如臨宝鏡。形影相觀。 宝鏡に臨んで、形影相い觀るが如し。

汝是非渠。渠正是汝。 汝是れ渠に非ず。渠正に是れ汝。

如世嬰兒。五相完具。 世の嬰兒の五相完具するが如し。

不去不来。不起不住。 不去不来。不起不住。

婆婆和和。有句無句。 婆婆和和。有句無句。

終不得物。語未正故。 ついに物を得ず。語未だ正しからざるが故に。

重離六爻。偏正回互。 重離六爻。偏正回互。

疊而成三。變盡為五。疊んで三と成り、變じ尽きて五と為る。
如◆草味。如金剛杵。◆草の味の如く、金剛の杵の如し。
正中妙挾。敲唱双拳。正中妙挾。敲唱双び拳ぐ。
通宗通途。挾帶挾路。宗に通じ途に通ず。挾帶挾路。
錯然則吉。不可犯忤。錯然なるときんば吉なり。犯忤す可からず。
天真而妙。不属迷悟。天真にして妙なり。迷悟に属せず。
因縁時節。寂然昭著。因縁時節。寂然として昭著す。
細入無間。大絶方所。細には無間に入り、大には方所を絶す。
毫忽之差。不応律呂。毫忽の差い、律呂に応ぜず。
今有頓漸。縁立宗趣。今頓漸あり。宗趣を立するによつて、
宗趣分矣。即是規矩。宗趣分る。即ち是れ規矩なり。
宗通趣極。真常流注。宗通じ趣極まるも、真常流注。
外寂内搖。繫駒伏鼠。外寂に内搖くは、繫げる駒伏せる鼠。
先聖悲之。為法檀度。先聖之れを悲しんで、法の檀度と為る。
隨其顛倒。以緇為素。其の顛倒に随つて、緇を以つて素と為す。
顛倒想滅。肯心自許。顛倒想滅すれば、肯心自ら許す。
要合古轍。請觀前古。古轍に合わんと要せば、請う前古を觀ぜよ。
佛道垂成。十劫觀樹。佛道を成ずるに垂んとして、十劫樹を觀ず。
如虎之欠。如馬之◆。虎の欠けたるが如く、馬の◆の如し。
以有下劣。宝几珍御。下劣あるを以つて、宝几珍御。
以有驚異。狸奴白◆。驚異あるを以つて、狸奴白◆。
◆以巧力。射中百歩。◆は巧力を以つて、射て百歩に中つ。
箭鋒相值。巧力何預。箭鋒相い値う、巧力なんぞ預らん。
木人方歌。石女起舞。木人まさに歌い、石女起つて舞う。
非情識到。寧容思慮。情識の到るに非ず、むしろ思慮を容れんや。
臣奉於君。子順於父。臣は君に奉し、子は父に順ず。
不順不孝。不奉非輔。順ぜざれば孝にあらず、奉せざれば輔に非ず。
潜行密用。如愚如魯。潜行密用は、愚の如く魯の如し。

只能相續。名主中主。只能く相續するを、主中の主と名づく。

宝鏡三昧提唱

井上義光著

洞山大師の『宝鏡三昧』を提唱することにした。『宝鏡三昧』は、石頭大師『参同契』とともに、洞門では毎日の朝課に必ず読んでおる重要なお経である。これをわかり易く述べることにしたのであるが、洞山大師の極意はどうしても坐禅を修せぬ限りわかるものではない。

この事は『宝鏡三昧』ばかりでなく、禅書はどれも坐禅を実地に修した人の書かれたものであるから、わかり易くと言うても坐らねば明らかに知ることはできぬ。そこで先づ正しい坐禅の方法を知っておかんと本当に坐ることが出来ぬから、真意は万劫にわからぬことになる。

耳に聞き心に思ひ修すときは

いつか菩提に入るぞうれしき

ここで先づ題号を説明せねばならん。題は額である。ひたいを見ればその人のだいたいがわかると同じに、一部の総表で全文の内容を知ることができる。『法華経』にはその題号の説明に三十巻という大部のものがあるように、大切なものである。

〔宝鏡三昧〕と古人が用いたのは、密附の端的に名づけた、即ち祖師の心印を言うたのである。洞山大師も先師の指導を受けて坐禅修行したのじゃ。徹底菩提心じゃ。道おのづからなる。ついに自分の体得した大悟底を歌曲としてものし、『宝鏡三昧歌』と名を附せられたのがこれじゃ。要は同じことじゃ。要するに、知る知らんにかかわらば、誰も皆本来具有しておる自己の本分のことじゃ。どうしても知らねばならぬ一大事因縁である。知らんと要せば直下に見よ。否、見つつあるものを。どうしても平生に修しておらぬと、ここがわからぬ。

さればとて、尋ねんとすれば総に不是。なんとなれば、尋ねんとする、そのものそれであるから、元より尋ねる必要は全くないのじゃ。否、他に向かつて求めるだけ道に遠くなるということを知らねばならぬ。だから永嘉大師も、〔求むれば知んぬ君が見るべからざることを〕と注意されておる。ここが大事な処じゃ。求むる心が起ると直に、求めるものと、求められるものとの二つにへダタッて、終に知ることができぬ。もともと一つものを、分別して二つに見るクセがある。つまり我じゃ。このクセを破るの

が修行じゃ。仏法の真髓は、クセをとりさえすれば自然に明瞭となるじゃ。先づその事を信じなければ、実地の修行が何時までたっても一条鉄といかぬ。そこでどうしても命懸けで坐禅をして自己を忘じ切らねばならぬ。つまり坐禅そのものになれよとなり。

本当に坐禅そのものになれば、一つものということが自ら明らかになる。もともと坐禅そのものには我もクセも迷悟も凡聖もないし又、人も法もない。只、坐禅ばかりじゃ。本当に修して本当に徹すれば、確かに脱落の消息がある。坐禅が坐禅を教えてくれることを決して疑ってはならぬ。要は古人の如く、命をはめて只、坐り切れればよい。真に洞山大師の再来人となるのじゃ。否、即心是仏の消息は釈尊より傳せる古仏祖師方の再来なり。故に、最尊最上の法門は、ただ坐禅の一法なりと知らねばならぬ。

宝鏡は宝の鏡である。鏡は無私のタトエによく用いられてをる。水と水と合して境が無いのと同じく、鏡は善悪美醜を見ず、写して然も写したとも何んとも思わぬ処に着眼するがよい。〔真空妙有〕と古人が言うたも嘘ではないぞ。脱落底の消息故に、自ら体得して自知する以外にない。分別をもっていちいちの実相を見るから、実相と自己とがへだたり二つに離れてしまう。この己見を破りさえすれば、真空妙有と現成して本来の面目を露出す。〔我れと大地の有情と、同時に成道す〕と言われし釈尊、明星一見悟道の消息がこれじゃ。仏々祖々命がけで密に単伝したるものは、本来の面目、釈迦牟尼仏の悟道の消息である。何人かその人ならざる。参。

すべて因縁無自性のままに自己がない。これが我々本有の宝鏡じゃ。互いに犯すべからざるものである。そこで古人も、〔門より入るものは家珍にあらず〕と言うておる、従来共に住して名を知らずじゃ。そのものの外に何も無い。何も無いから因縁次第で何にでもなる力があるのじゃ。

まことに照観無私である、宝鏡である。自己を本当に忘ずれば、あるがままの無私と現成す。知らぬ者が自ら知らぬだけじゃ。そうなれば苦しみも悩みも別物ではない。苦しみ三昧、悩み三昧じゃ。要するに、心配はしても心痛せぬ洒々落々の境界である。三昧は法なり、そのもの自体活動自体なればなり。実はだれも常にそうであるが、二つに見るクセがあるために気が付かぬだけじゃ。妙なものである。ために古仏祖師方が悲しまれ、大悲の法門を垂れたまいて一切経を相い伝えてくれた。度衆生なり。大慈大悲なり。諸人この暖皮肉を看取せよ。

洞山大師今われらがクセを打破して大安心を得しめんがための講釈じゃ。この大恩深く謂うべし。これをして洞山大師を再来せしむるの報恩人たれ。これより、いよいよ本文じゃ。三百七十六文字の血滴々、参玄の人切によく看よ。

如是之法。仏祖密附。如是の法。仏祖密に附す。

汝今得之。宜能保護。汝今之を得たり。宜しく能く保護すべし。

これは『宝鏡三昧』の大綱を一口に示されたものじゃ。まことに偉い事を言い出されたが、洞山ばかりの事と思うまいぞ。本来皆、是の如くなればなり。眼に色、耳に音声じゃ。この法は万劫に不変不易である。立つ事自在、歩く事も自在、然も変化しながら全くそのものに着せぬ。我々の全体が、是の如く道の丸出しである。

是の如く仏祖と同時同性じゃ。〔仏祖密に附す〕とはここじゃ。〔汝今之を得たり〕と証明した。洞山大師にウソはない。今より以後、迷うことなく事々物々に成り切り、成り切りして、法たらしめ護持して行けよとなり。つまり如法に従ってクセを入れずに、只あれば、仏祖と同事同性仏境界なのだぞと教示せられたのじゃ。実に勿体ないことではないか。そうと聞かばやらでやわ。

元古仏云く、〔人々分上、豊かに備われりといへども、修せざるには顕はれず、証せざるには得ることなし〕と。この言、万金の値有り。されど今日捨てて信ぜざるもの多く、古仏の形のみマネたる自然外道の打坐多し。何処まで行っても迷いの延長と知るや知らずや、いとおぼつかなし。

他は之れ暫く措く。我等が釈尊直系は、即洞山大師と直系じゃ。如是の法仏祖密に附する底の証を得ねば、児孫とは言えぬぞ。

仏祖も只是の如く、生死涅槃も是の如く、六凡四聖も乃至山河大地森羅万象も、只是の如くならずということなし。これを〔諸法は如是の相〕という。いちいち諸法故に、法ならざるものなしということじゃ。六根清浄というも遅八刻、見たまま、聞いたままで手が付かぬ。この上求めようとて得べからず。迷いようもなければ悟りようもない大地と有情と同事成道底である。

〔這箇の妙心〕、と古人は言うた。これを明めたのが仏祖である、明めずへダテて二つに見ておるのが凡夫じゃ。自分の正体が自分で分からぬとは実におぼつかないやら情けないやらじゃ。只々菩提心を起こして正法の人たれよ。発菩提心とは万事を放下し、身をも心をも忘れて、地限り場ぎり事々物々そのものの単になってやる決心である。理想実現の原動力じゃ。発心正しからざれば万劫空しく施すと、初発心の正か邪かを古人も痛く心をくだかれてをる。

要は何度も言う如く、いきなりその物その物に徹して無私なれば不二じゃ。する方、される側というへダテがない、二つながらの一つ、これが如是の法じゃ。道理も理屈もいらぬ、只縁に任せて心を用いなければ、そのまま如法じゃ。如是の法じゃ。

達磨大師は、直指人心見性成仏と言うたぞ。直きに人の心を指してその性を見れば仏であることがわか

るぞ、というのじゃ。一超直入如来地と言うも同じ。差別そのものになり切って自己無き処、差別とは事物及び人じゃ。言葉を変えれば因縁じゃ。いつも因縁、すべて因縁ならんや。本来因縁に自性が無い、即ちかたまりものがない故に変化自在にして極まりなし。その元は無常じゃ。我等の身心が既にそれである。立っても坐っても泣いても笑っても、喜んでも恨んでも、一つとしてその相に固着して留まる事が無い。無常にして無我なることも、ここいらで納得できたであろう。無常にあつて無常を生かす。即ち無常になり切ってやるのじゃ。確かに無我なる実相に体達するを保証して疑わぬ。

何事も始めが大切じゃ。大切なことを述べるは今じゃ。禅の特色は的々相承し、一器の水を一器に注ぐが如く、師より弟子へと証明によって継がれている事を知らねばならぬと共に、その一大事因縁が如何に重大であるかを思うべし。証明なき宗教ほど危険なものはない。折角菩提心の者があつても、邪師によって邪路に導かれつつ、学人は信じてついて行き、果ては一生を棒に振る、誠に恐ろしい事じゃ。法の上からは迷も悟も凡も聖もなく、仏祖と同事同性、皆な法に背いた物は一つもないじゃ。法は是の如くあつても、人はそうは行かぬ。本来具有底のものでも、それに気がつかねば無きに等しい。気が付いても本当のものであるかどうかは疑わしい限りじゃ。

大方の悟りは、皆な意識の分際と言うてもよい。そこでどうしても釈尊の直系を直系として証明されて始めて、真の宗旨を得たということが許されると知れ。

〔仏祖密に附す〕とあるは、釈尊が大悟せられた心印を、迦葉に附せられた密附の単的をも言いたかつたからじゃ。それを単伝して印度二十八代。有名な達磨大師まで継いだのじゃ。達磨は師の命に従つて、三年かかって支那にたどり着いた。最初にたどり着いた地が広州じゃ。この曠恩を深く思うべし。大法のために身を忘るは、只大法重きが故のみ。心印を伝えるべく、その人のために十万里の波濤を超えて来られたのじゃ。

その人とは畢竟誰のことぞ。人事と思う輩は共に禅を語る資格はないと知れよ。

洞山大師を語るためには、どうしても支那第一祖達磨大師を語らねばならぬ。達磨若し東土に来らざれば、如何にしてか釈迦牟尼仏の心印、脱落の消息を得てんや。達磨なくんば洞山なし、洞山なくんば曹洞も又世になし。本朝の元古仏もなかるべし。

当時仏法好きな天子、梁の武帝に召され、〔無功德〕で勘破し、正法の器に非ずと、その夜逃げて嵩山少林寺に向かったのじゃ。そこで何も言わず、只坐禅するばかりじゃ。面壁九年の消息は、二祖神光慧可大師によって辛くも護持された。しかし、二匹の犬に六度毒をもられて死んだ。二祖は首をはねられて死んだ。恐ろしいことだ。法難の極はその後も暫く続いたが、菩提心は菩提心に通ずじゃ。六祖慧能禅師に至って、ようやく日の目を見ることができた。

六祖下に二神足が出られて、忽ち正法天下に広まった。青原と南嶽がそれじゃ。青原の子が石頭で、その子が薬山で、その子が雲巖で、その子が洞山大師じゃ。洞山悟本良介禅師という。曹洞宗の開山じゃ。仏祖は我々の祖先である。自分の祖先を知らねば親不孝というものじゃ。少しく師について説くとせんか。

師幼少の時、念経師に従って般若心経を誦するや、[無眼耳鼻舌身意]に至るに及び、忽ち手を以って自らの面を捫て、「某甲、眼耳鼻舌身等あり、何が故に経に無と言うや」と。洞山生れながらの禅骨じゃ。その師おおいに驚いて、「われ汝が師に非ず」と言うて、五洩の靈黙に往かしむ。年二十一にして嵩山に上り、即ち具戒す。其の後、南泉、◆山、次いで雲巖に詣す。

[無情説法]の話で気がついたが余習未だ尽きざるありとて雲巖許さず。百丈再参の故もここにあるのじゃ。皆な只管の錬りが足らぬのじゃ。どうしても百尺干頭歩一步を進むるの菩提心がいる。容易の看を為す勿れ。後に川を渡るの因み、許さざりしの玄旨を大悟して即ち頌して云く。

切忌従他覓。迢迢与我疎。

我今独自往。處處得逢渠。

渠今正是我。我今不是渠。

応須恁麼会。方得契如如。

ここにおいて始めて宗の大事を了畢せり。直指单伝第三十八祖なり。洞山大師の境界は申し分なし。はなはだ明晰な悟入である。悟とは何んぞ。何も言う事がなくなった本地の風光じゃ。絶妙の境地と思えばよい。

六十三にして寂を示す。子に雲居道膺、曹山本寂等最も其の名あり。『君臣五位』、『功勲五位』、『宝鏡三昧』、『四賓主』、『参綱要』等の著作禅門の宝書なり。読まざるべからず。他に洞山守初あり、雲門の法嗣じゃ。『無門関』十五則及び十八則の洞山じゃ。よく間違えられる。又洞山師虔あり、青林師虔のことじゃ。洞山大師の法嗣である。まだあるから祖録を読む時には大いに注意してもらいたい。

今はよい資料が沢山ある故に、更に詳細を知らんと欲するものは、それに任せて可なれども、洞山門下の士は生きた洞山大師に親しく相見する事にあるを忘れてはならぬ。法は極誠にして最も神聖じゃ。敬するに時空がない、愛するに無限である。余外の者にはどうしても窺い知ることの出来ぬ仏境界が[宝鏡三昧]なり。殺せ殺せ、我身を殺せ、殺し果ててなにもなきとき、始めて人の師となれ。

[如是之法。仏祖密附。汝今得之。宜能保護]の句は、最後の[潜行密用。如愚如魯。只能相続。名主

中主]の句に照応せしめた絶妙の響きじゃ。『証道歌』と同じ文法上の作略である。

三百七十六文字の一字一句、[宝鏡三昧]ならぬはない。知らぬ者が自ら知らぬだけじゃ。知らさでやは、そのためのものじゃ。参じて知るがよい。

銀◆盛雪。明月蔵鷺。銀◆に雪を盛り、明月に鷺を蔵す。

類而不斉。混則知処。類して斉からず。混ずるときんば処を知る。

いちいちに当たって、只だ自己無きを実修して行くばかりじゃ。凡情を捨てては即今底に参じ、歩けば歩き殺し、見れば見殺し、坐れば坐り殺しておると、相手ながら相手のないということがわかってくる。自他の隔歴が取れて来ると、自らそのものと親密になり一体となって如法に現成してくる。そこを

[銀◆盛雪。明月蔵鷺]と形様したるは洞山の手腕じゃ。

銀◆は白く又雪も白い、[銀◆に雪を盛る]と見分けがつかぬ。差別ながら一つになって入我我入して水も漏らさぬ一体の処じゃ。[明月に鷺をかくす]と言うも同じ。因縁に依って異なっておるが、元来一つものの別れじゃ。無自性故に物と物と親密にして矛盾を見せぬ。その物と一つになって跡を見せぬ。[蔵す]と言うはここじゃ。ただ純一に在れば、顛倒の起こりようがない。自己なければなり。打坐の一法に蔵すれば可なり。打坐のみならず、差別そのものに成り切って差別を忘れると、差別の一法が平等を教えてくれる。参じて自知の外にはない。仏法天地に満つ、更に会することをういて何かせん。咄。

しかしながら、物と物と混合しておれば、無差別のようにみえる。なまかじりの禅をやると、一方に偏して箇々の差別を無視し、秩序を軽視した自然外道となる。無常にして無自性なれば、その時そのものの外に何も無い。一方に偏するは自己あるがためじゃ。自己あれば必ず事物と心とが離れて、顛倒妄想する諸悪の根源となる。しかしながら心が無限に縁に依じて変化する如く、縁も又無限であるから法も又無限なのじゃとなり。事々物々因縁所生の法、今いま、只だ縁に従って差別を忘れてやれよ。差別そのものが法だぞとある。[類してひとしからず。混ずるときんば処を知る]と言うはそこじゃ。

一つなれば純じゃ。二つ以上は混合じゃ。されば混じて迷うは意識の分際で、二つは二つながらそれぞれの処を得て、決して等しい一つものではないぞ。本当に自己を殺したならば、すべてはっきりするぞとの底意じゃ。

意不在言。来機亦赴。意言に在ざれば、来機亦赴く。

動成◆白。差落顧佇。動ずれば◆白を成し、差えば顧佇に落つ。

自我というは、二つにへダテて見るクセを言う。つまり意識で分別するクセじゃ。分別そのものが因縁性空ならば、諸人畢竟如何となす。ただ、自らの性に徹して、自性空を自知するより道はない。徹するとは、そのものに純一になる、つまり無雑じゃ。只管というも同じじゃ。自我なきことと思えばよい。宇宙大なるが故に、一言一句一挙一動をして仏作仏行の外はない。日用光中なり、大光明なり。

この言外の消息は、言葉をもって顕わすことはできぬ。文字言句の及ぶところではない。八万四千の法門は、このへダテのない心、即ちほどけた仏の様子を説いたものである。文字言句の外に一大事あるを知らしめたいのじゃ。そこを「意言に在らず」と注意されたのじゃ。

ところが、学人は見たら見たものに心を動かし、聞いたら聞いたものに心を動かすクセがある故に仏祖の言説を、知識で理解しようとする。経論のすべては、月を指さすまでのもの、ところが見たり聞いたり、因縁に心を動かす従前のクセは、正しい修養をもってしなければ、なかなか指から離れられるものではない。有を遣れば有に没し、無を与えれば無に着し、学人はアアでもないコウでもない、他に向って求め廻る気の毒さ加減を「来機亦赴く」と言われたものじゃ。「来機」は学人で求道の士を言うが、ここでは己見をもって自己流の修行をし、未だ只管の片鱗さえ知らぬ者を指さしてをる。とにかく、他に向って求めず、足元に注意して怠るなよ、との底意を知らねばならぬ。

少しでも他に向って、相手を認めると自己がたつ。へダテが生じて、そのものから離れて顛倒妄想の落とし穴となり、自らそこへ落ち入ってしまうぞ。心を用いて法に順じて、心を用いておるのでそれだけ自己がたっておる、だから法の入りようがない。そこで「動ずれば◆白を成す」と言い、「差えば顧佇に落つ」と足元への注意じゃ。「◆白」とは、鳥の巢の、樹上に在るを巢といい、白の如き穴を掘った巢を◆というところある。「顧佇」とはキョトキョトして躊躇する様である。不安にして疑議に走るじゃ。皆、即今底を抜きにしておる。今、今ばかりなり。其のものそれなり。余物なきなり。自己なきなり。仏法の極意は、自己を忘るるにある。畢竟、只管打坐、只管活動に帰納し去る。

元古仏云く、「我が身をも心もはなち忘れて、仏のいえになげ入れて、仏のかたよりおこなわれて、これにしたがいもてゆくとき、ちからをもいれず、心をもついやさずして生死をはなれ仏となるなり」と。元古仏にウソはない。誠に有難たい教えである。切によく看取せよ。

背触共非。如大火聚。背触共に非なり。大火聚の如し。

但形文彩。即属染汚。但文彩に形せば、即ち染汚に属す。

今はいつも今じゃ、即今はいつも即今じゃ。そのものはいつでも一杯一杯なるが故に、前にも後ろにも左右どうすることもできない。其のまま、其のまま。如是、如是。真箇如是ならば、其のままというものもない。ここが只管の標準なり。見るままなり、聞くままなり、動くままなり。そのものに任せ身も心も放ち忘れて、昼夜を見ずに徹底鍊るがよい。

少しでも意を運んだり、認めたり、或いは無視したりしたら大変なことだ。背かれもせず、触れられもせず、どうかしようとてもどうにもならんぞ。即今如是の法は、ざっとこのような大火の玉じゃと言うのが、〔背触共に非なり。大火聚の如し〕じゃ。

本来大火聚である。どうもする必要のない如是心であるから、どうかしようとするクセ即ち意根を打坐の一法で焼き尽くせよ。成り切れとなり。ああだ、こうだと色々と言い顕わそうとするから真実の法が汚れてしまう。この上文彩の必要がどこにある。それが解らないから文彩をつけようとする。それだけ自我が立って法とへダタることを知らぬからだ。一度はどうしても自己を忘じ切るまで坐らねば、何んと言うても解らぬものじゃ。

皆な因縁所生の法ということも、ああだこうだというてみるクセを取らねば明白にならぬ。この大自然の法には混ざりものがなんにも無い。どこまでも真実のみじゃ。打坐そのものは勿論真実であるが、人が真実の打坐をしているかどうか疑わし。ここにおいて、打坐到真実とそうでないものとあることを知らねばならぬ。

真実の打坐には何にも混ざりものが無い。大自然の打坐じゃ。宇宙いっぱいの打坐である。これを只管打坐と言うのじゃ。雑念妄想の入る隙間は何処にもない。意根の確かに坐断出来るは、只この真実の只管打坐のみと知れ。本当に只坐ればよい。只活動すればよい。つまり文彩を付けなければ、染汚のない円通無碍の大道が明白になるぞとなり。

奥山の白木の合子其のままに

うるしつけねばはげようもなし

本来本法性、天然自性身を言い得て妙なり。

欲く深き人の心とふる雪は

積るにつれて道を忘るる

文彩に落ちれば天然自性身を汚す。有財餓鬼と化するも哀れなり。されど罪も無自性空にして固まりも

のなきが故に、菩提心さえ起こせば罪転じて光明となる。本来本法性、天然自性身なれば、一超直入如来地も特別な事ではない。やれば誰れでもやれる事になっておる。なんと痛快な法身ではないか。そこで、

夜半正明。天暁不露。 夜半正明。天暁不露。

為物作則。用拔諸苦。 物の為に則となる。用いて諸苦を抜く。

とある。只管が本当に錬れてくると、自ら文彩がなくなる。つまり理屈がとれてそれだけ自由になり楽になる。自分に矛盾がなくなるから、今が明白になり、そのものと親しくなって縁のままに只やれる。確かにして明らかなりじゃ。

〔夜半〕は真夜で真暗らじゃ。真暗らの一法ばかりなれば、これほど確かなことはない。そこを、〔夜半正明〕と言うのじゃ。真暗らの時、真暗らという文彩がないから、明暗を超越しておる。真暗らほど明るいことはないぞとなり。自我なきほど自由は無い。ここは境界もの故に、チョット只管に気が付いた者でなければ解らぬじゃ。

〔夜半〕の真暗らは物なき如く、空に着して箇々の光りを見失う危険がある。悪平等と言うやつじゃ。一面に偏すると真実に背く、そこで、〔天暁不露〕と注意された。〔天暁〕は真昼間じゃ、明々白々、箇々現成じゃ。〔不露〕は、露出してない、分けて見るなよ、と言うことである。差別のまま、明々のまま、箇々のまま理屈を付けなければ、そのままじゃ。確かに真昼間ほど暗いものはない。自己なき様子じゃ。凡眼ではどうすることも出来ぬところである。要するに相手をたてずに、心を用いずに只やれば、総ての事が解るぞと示されたところじゃ。

そうすれば、〔物の為に則となる〕。一切がこの道に依って生れておるからである。随所に主となるのである。一つ一つ箇々円成、宇宙の主人公ならぬはない。〔則〕を〔主〕の字に書いたものもある。元来物のために則となってそれぞれ作用し光となっておる。ただこちらの方に雑物があり、汚れておるからその価値が解らなぬだけじゃ。物あれば必ず作用あり。作用は道じゃ。差別そのものである。光りであり法である。今の見聞覚知それが既にそれじゃ。常に今、縁のままに、法のままに任せ切って行くなれば、必ず真実の道を識得する時節がある。〔識得すれば仇をなさず〕、と古仏も言うておる。脱落はいつも脱落であるが、本当に天然自性身の大自覚がなければ諸苦は消えはせぬ。

〔用いて〕とあれば、自己を運んでいるかに思うかもしれぬが、天然妙心の汚れない道を踏んでヘダテ

を取ることにゃ。仏法は救いである。〔用いて諸苦を抜く〕は修行の中心である。薬を用いて病を治す事じゃ。これが仏の誓願である。又我等が諸苦を抜くは、衆生の諸苦を抜き大安楽を与えんがためであるを忘れてはならぬ。我等が修行は即一切衆生の修行なり。人の諸苦を抜んがためには、先ず自ら諸苦なきを期さねば、理想世界全体の様子が解らぬ。畢竟どの方向へ、どのようにして導けばよいのか方法が解らぬ。そこで四弘誓願が要ることになる。これを忘れた坐禅が横行すると、正法かえって邪法となり、法を滅亡させてしまう危険があるのじゃ。

諸人、仏々祖々の血脈はこの四弘誓願にあつて、他なしと知るべし。今よりこの誓願に深く染まれよ。

衆生無辺誓願度。煩惱無尽誓願断。

法門無量誓願学。仏道無上誓願成。

少林の雪にしたたるから紅に

染めよ心の色あさくとも

これが本当の菩提心である。真箇の打坐となり、尽法界仏印となるじゃ。

雖非有為。不是無語。有為に非ずといえども、是れ語なきにあらず。

如臨宝鏡。形影相觀。宝鏡に臨んで、形影相い觀るが如し。

宇宙は因縁である。始まりも終りもない。常に変化して固った相を持たぬ故に、時間も空間も計りようがない。不可思議と言うが当れり。天然の妙法なるかなじゃ。誰れも作り主がないのに、因縁所生の法に従つて、宇宙の一切全く矛盾なしに運行しておる。我等も又然り。腹がへったら食し、渴すれば飲す。立っても坐ってもその実体がない。只因縁ばかりじゃ。主体がないのに時々円成しておる。ここを〔有為に非ず〕と言う。

そのものは常にいっぱい、いっぱい故に、この上着することも離れることもできない。〔道もと円通〕と元古仏は言うた。真如法界と言うも、非思量と言うも同じ。

このように真実の世界は、思うても言うても手が付けられないものであるが、だからと言うてそのことに着すると、自由の分を失つてこれ又真如に傷を付けてしまうぞ、と言うのが〔是れ語なきにあらず〕じゃ。語れば口に満つるではないか。柳は説く観音微妙の相じゃ。語り尽して出ず東山の月。満身耳なれば、ことごとく目に音声を聞いておるではないか。そのものが全てを語っておることを知れ、となり。単に言語ばかりと思うは凡眼の悲しさならずや。そのものは、そのものに問うより外に道はない。

その物に問うとは、添ものなしにその物ばかりを言う。徹して自己なきままじゃ。認める物無き事が解ると、法として特別な物も無いし、心として取り上げるべき物も無い事が判明する。

水と水と合し、空と空と合する如く境目が無い。相手ばかりになれば自己は相手に殺されておる。相手として認めなければ、相手ながら自己の上に納まって一つになっておる。境えがないところが有難いのじゃ。入我我入した様子である。例えて言うなら、[宝鏡に臨んで、形影相い観るが如し]と洞山大師の形容じゃ。

本来これという固ったものは何一つないし、取り立ててこうだと言う物も無い。にも拘らず、[宝鏡]と[臨む]の如く両方二つに分けたり、[形]と[影]とに言うのも、慈悲からやむをえず親切を尽されたものじゃ。釈尊は、[三界唯一心造]と言われた。ヘダテが取れた上からの大信念、大安心の消息である。

洞山うまく次の句を導いた。自分に覚えがあるからどうしても言うておきたいことがある、との底意。何故にことさら分けて見せたかと言うと、マア次を看よ、となり。

汝是非渠。渠正是汝。汝是れ渠に非ず。渠正に是れ汝。

如世嬰兒。五相完具。世の嬰兒の五相完具するが如し。

ワシがその昔し、修行々々と言うて苦心しておったが、心を以て他に向ってやっていたため、どうしても明白な証しが得られなんだ。ところが、機縁純熟、思わず忽然として自己を忘じた。すると今までの求心が返って法に背き、別に求めていたことが明白になった。如々法であり時々仏であったのに、心を動かし自己を運んでしまって、ついに自ら法にヘダタっていた。自己を忘じ脱落して見ると、結局はただ自分の思にとらわれていたに過ぎず、自我を殺せばよかったのじゃ。只、本当に徹して自己を忘じてみよ。仏祖の言われた通り如々として別事はない。と、洞山悟道の句に言えり。良いものは何遍読んでも良いじゃ。[切忌従他覓。迢迢与我疎。我今独自往。如如得逢渠。渠今正是我。我今不是渠。応須恁麼会。方得契如々。]

ここから転じてきたのが、[汝是れ渠に非ず。渠正に是れ汝]である。宇宙は因縁じゃ。自性空故に、常に変じて跡を留めぬ。一つものゝ変化、因縁仮和合の一時の相に過ぎぬ。生も一時の法位、死も一時の法位である。一つものゝ別れである。真空妙有とあるはこゝじゃ。自己無ければ自己ならざる無し。相手も空自分も空にして共に因縁仮和合なれば、因縁合して法位を現成する。もとゝゝ自己は無い、大

道なり。

宇宙一枚の宝鏡じゃ。宇宙いっぱい形影である。自己の無い様子じゃ。自他一体無二の真空平等と現成しつゝ、やはり見るは柳ぞ、聞くは溪声じゃ。法位を無視することも我見であるぞ、とソット注意をされた。差別に生れ出て、法のままに活動使されて行く力は容易な事で得られるものではない。

知恵ある者が知恵を以いずに、只活動して行くことは赤子になることである。馬鹿になることである。拘わりがなくなり、本来の自由さが現われるじゃ。〔世の嬰兒の五相完具するが如し〕とあるように、どんなに馬鹿になっても嬰兒でも、五相の上にすべてが模様され、整い、しかも完全に治り終っている。

知恵が悪いのではない。分別するのが間違っているのでもない。これ等皆共に〔五相完具〕で必用な道具である。ただ常に変化し相を転じているのに、いちゝゝを認めて執着するクセのため、その作用の自由な働きを失い、無限な心の動きを自ら小さくし汚している。

即ち、すべてが五相の上に於て綾なされておるその時限りのもの、という自覚がないため、他に向って無いものゝ追究をくり返しておる。永嘉大師は〔幻化の空身〕と言うた。正に転倒妄想じゃ。それがそれなら、安住して単々と只あればよい。それがそれでしか無いのじゃから、それを無視する事は出来ぬ。そこを永嘉大師は又〔即法身〕とも言うておる。〔幻化の空身〕が〔即法身〕じゃ。そこでどうしても心の性体を究め、汚れのない心眼でなければ法身だと分からぬ。一度は転倒妄想しておる分別心を殺さねば、本当の様子が判然とせぬ。

殺すに最もよき方法は只管打坐の一法である。只管には老若男女はない。時空を超越した無二無三の処じゃ。生れる前の様子も死んだ先の様子も解ると言うは、決して嘘ではない。

〔嬰兒〕はミドリ子で一二才か。古来より私のない例に用ゆ。天真爛漫の妙用じゃ。

おさな児のしだいしだいに智恵つきて

仏に遠くなるぞかなしき

不去不来。不起不住。 不去不来。不起不住。

婆婆和和。有句無句。 婆婆和和。有句無句。

終不得物。語未正故。 ついに物を得ず。語未だ正しからざるが故に。

〔諸法従因縁生。従因縁生故無去来。無去来故無所住。無所住故畢竟空也。言是般若波羅密多〕と、

『大論』にある。[不]は空なり。無自性なり。集りて成れる因縁性じゃ。本来脱落と言うことなり。去来に相がない、跡方がないとなり。自己を忘るを[不]と思えばよい。超越じゃ。子供の境界というものは相手を見ない。執着心がない。因縁に任せて自由自在じゃ。何人の様子もそうであるが、認めて心となすが故に自我を生ずる。[不去不来。不起不住]の通り如々としてゆかない。

一言々々そのままじゃ。一時の相に過ぎぬ。それに執着しようにも消えて跡がない。何んでも転じて話せるじゃ。この用い尽しておる真相を知るのが仏道修行である。心力を用いると自然の妙用に背くため、一大事因縁の大自覚がもたらされなくなる。どこまでも[婆々和々]となり赤子となって、[有句無句]共に忘れてやるのじゃ。[婆々和々]というのは、赤子の話しで音の符丁じゃ。聞くに只聞くばかり、話すも只話すばかり。いっぱいいっぱいにて余物の入る余地などないぞと、洞山大師つめ寄ったのじゃ。慈悲至れり尽せり、有難いことではないか。

『信心銘』に云く、[多言多慮。転不相応。絶言絶慮。無処不通]とある。世知に巧妙なる者は思慮分別に逞しいし、その精細なるを以って処世術と思うておる。心平かならずじゃ。常に見聞覚知が気になる故に、比較推量して自ら苦を招く。道にいよいよへダタるじゃ。[契理亦非悟]と古人も言うておる。論理がどのように優れていても、脱落には関係無いじゃ。どんなによい事であっても、それに着したら足元が死ぬ、道を究めることが出来ないぞとある。[ついに物を得ず。語未だ正しからざるが故に]と示して注意を促された。

捨てよ捨てよ、今じゃ今じゃ。自己が立てば物が立つ、物が立てば執着心が起きる、それを得ようと求めだす。多く書物を読むと、何んだか尊いことがありそうに思うし解りそうにも思えてくる。これ等を根本から解決する道が仏法じゃ。心地を開明すれば足れり。先ず大願心が本である。無常迅速じゃ。一切を放下して、只如法にあれば必ず縁に当って打発する。時々大法、処々縁でないものはないが、知恵の文彩が道を汚しておるから解らぬ。一切放下の処、自なし他なしじゃ。気が付かぬ筈がない。一切を放下せよ、と言うと何んだか総てを失うような気がする。物を相手に思うからだ。ただ心に留めるな、認めるなと言う意なり。縁に任せて自己を忘るの妙法を修するばかりなり。どんな境遇にあらうとも、五相の上に尽きる、一つ心の作用に過ぎないじゃ。一切即一と帰納し、一即一切となって現成しておる。次がその説明なり。

重離六爻。偏正回互。重離六爻。偏正回互。

豊而成三。変尽為五。豊んで三と成り、変じ尽きて五と為る。

易の道理を借り来って、人々分上底であるぞ、他に何一つ無しと足元への激励じゃ。算木の説明をしてみた処で意味はない。一つ物の変化であり、基の一真実を明瞭にすれば総て治るとのことじゃ。つまり、人々の心眼を開かしめんための慈悲落草なり。本当に一步を守れば千歩万歩もその中にあることが解る。歩に相がないからだ。十重禁戒も本当に不殺生戒の一つを守ったれば、他の九戒乃至十六条戒等悉く円成する。何が故ぞ。〔既に是れ一戒光明也。宇宙は一実相也。古今は総て仏性戒ならなざるはなし〕と。これ◆隠然大師底じゃ。然大師のは何時もいいぞ。只管打坐は辺法界なり。只管活動なり。一切戒法を具し仏法現前せしむるは、仏祖正伝の只管打坐なり。〔三界唯一心造〕の消息である。戒法に背くべきなしじゃ。次も同じく一切即一、一即一切の例えなり。

如◆草味。如金剛杵。◆草の味の如く、金剛の杵の如し。

〔◆草の味〕とは一名五味子ともいう草で、五味を具すると言われておる。即ち皮と肉は甘くして酸く、その核の中は辛くて苦い、そして全体に塩気があるという。〔金剛の杵〕とは、真言宗等にて用いられるトッコウのことじゃ。如来の清浄法界体性智を表した、中が一本で両端の五にてなる法器なり。五位と言えば洞山、洞山と言えば五位とまで言われる通り、五位の開山である。分け得べからざるをこと更に分けたるは、一切の万象万法即ち差別を明白にしないと、法の空なることが解らない。法空の処真空妙有じゃ。かくして真の道人と印することができる。自由無碍、洒々落々の仏境界じゃ。

大安心はすなわち因果に任せて心を以いざる大安住なり。無意なり無作なり。畢竟〔只〕なり。まとめて説けば是の如し。只の世界こそ仏の境界であることを忘れてはならぬ。

洞山大師の言われたる五位とは、因縁所生の法を説いておる。一人の時と所と位によって、それぞれ立場や機能が異なる如く、自分の家にては主であり、他家にあっては客であり、教える側なれば先生、学ぶ方なれば生徒たるそれぞれの法位にて変化する。只管を鍊ると自己がとれる。常に法位を全うしておることが解る。法位に上下はない、前後もない。差別も平等もない。法も空じゃ。空も空じゃ。真空妙有はよく只管のみ教ゆる一大事因縁である。

差別と平等は禪家の最もやかましく言う処であるが、解り易く言うと、一つの物事を縦から解るか横から解るかで、言いぶりが異なる。そのものは差別とも平等とも言わぬ。一面に偏して真相を殺してをると正法に生れることができない。そこで薬として病人に与えるじゃ。差別に墮すと因果にくゝられて自由

を失う。そこで因果を横に並べて見せ、平等なることを教えるのじゃ。かくして因果にあって因果を自由に使い尽してゆく妙法が得らるるじゃ。洞山大師の真意はこゝにある。趙州の所謂、[汝等は十二時に使はれ、我は十二時を使い得たり]と。衲曰く、[使い得て後如何]と。これで天下清じゃ。今一と五を平差と見ればよく解るであろう。

正中妙挾。敲唱双拳。正中妙挾。敲唱双び拳ぐ。

通宗通途。挾帯挾路。宗に通じ途に通ず。挾帯挾路。

ここも前の続きじゃ。[正中]は五位の一つで法位と見よ。仮に設けた手段で、至り得れば皆不用じゃ。自ら五位と現成するからだ。[妙挾]と言うたはこのことじゃ。[挾]とは腋の下にて、両側からはさみ持つ様子なり。[妙]を附して、自由に扱う自己なき働きを示した。宝鏡の妙用と思えばよい。妙用と言えは何んだか有難たい作用でもありそうに思うかもしれぬがそうではない。我等が日用の外にはない。心地を開明すれば一切明白じゃ。自我の悪毒は限りなし。なんぞ計らん、無自性を識得すれば本来大我なることを知る。返って大光明宇宙を照しつゝあったのじゃ。

[敲唱ならび拳ぐ]、も同じなり。楽団の演奏と歌い手とが水も漏らさぬ一体現成を借り来って、日用光中塵々三昧の妙なる響きを聞いてみなければ、人生の真価は解らぬとなり。如何にすれば聞くを得べきや。聞かまほし。面に付いた耳では聞こえはせぬ。一度死んだ、無い耳をもってこい。如何にすれば死ぬを得べきや。只坐上にて候。死ぬとは、成り切るを強く言うたものじゃ。今がそれじゃ。成り切るに時空はない。只あればよい。自己の入る隙間はない。

自己を以ち出さぬから総てが自己の上に現成すじゃ。何をするにも衝突せぬ。衝突する相手が無いからじゃ。洞山大師はここを、[宗に通じ途に通ず]と言うた。因果を使いこなしている様子である。我等が全体すでにそうであるから、即ちその[宗]（道）に私を入れずに只やれよと教えておる。[途]は道なり、延びた道のことじゃ。如何なるか大道。大道長安に通ず。[挾帯挾路]じゃ。言々句々源に歸し、一挙一動本に通ぜざるはない。どう転んでみても道に背いたものはない、との底意。[帯]とは横に長く延びたるを言う。転じて着物を一つにまとめる長い帯のこととなった。帯を締めてキリリと仕上げるを借りたのは、締ねば前がはだけて動けぬところから帯がどうしても用るからだ。[挾路]とは、自由に行き来するには各家各処を縦横に路を設ける活作略が必用じゃ。先づ自己を忘れてからのお話しじゃ。

障りのない道は、万事に通じておる。これを如来の大道と名づく。

錯然則吉。不可犯忤。錯然なるときんば吉なり。犯忤す可からず。

天真而妙。不属迷悟。天真にして妙なり。迷悟に属せず。

カーライルは、[心臓の鼓動は墓場に近づく進軍のマーチなり] と言うた。さりとして神経質的に世をはかなんで山に入るは愚じゃ。又云く、[為すあるの一日は尊ぶべき一日なり。務めよ務めよ] となり。

孔子も渭水の辺に立って、[逝くもの是の如きか昼夜を捨てず] と自己を反省したのは、さすがに聖人じゃ。我等も聖たる身ではないか。徒らに自己を卑下することなかれ、勤むるの一日は聖への道ではないか。只是れ菩提心。又何をか言わん。

世俗は利欲の巷にさまよい、自ら苦しんでおる。何と気の毒ではないか、救わずはおかじじゃ。徒らに利欲を嫌らうのではない、利欲に惑わされ巻き込まれて道を見失う。自己が立てば皆道に背く、故に只管に修行する内は菩提心で切り捨てては道を重くしてやるのじゃ。[利を取るに自ら道あり、不義の富は浮雲なり] と孔子も言うておる通りじゃ。[利によって行へば、恨み多し] ともあるぞ。皆名利のために苦しむは、道を知らざるがためのみである。[道念濃厚なれば世念軽微、世念濃厚なれば道念軽微なり] と、ちゃんと古人が訓戒を垂れておる。深く反省すれば、道念自ら生ず。時人を待たず、無情の因果は如何とも致し難し。

道念生ずればもうしめたものじゃ。道の上から自分が恥しいと思うようになる。世念が軽くなると世法が仏法となる。道として生きてくる。本来の光は一切を照して円万相じゃ。ミチミチで大満足じゃ。自己がないから、大満足はそのまま大愛心となり、又大恩心ともなる。上を敬い自分を慎しみ下を愛するようになる。何んと素晴らしい境界ではないか。

洞山大師も讃えずにおかなんだ。[錯然なるときんば吉なり] と言うた。脱落すると道が明らかになり皆生きてくるじゃ。過去も未来も即今現成底じゃ。[皆仏事をなす] と、元古仏は言うた。仏、仏を犯すべきや。水、水を濡すべきや。だから、[犯忤す可からず] との厳命じゃ。犯忤するは自己あるがためのみ、自己を殺せと言うに同じ。

[錯然] とは、交錯と敬慎の二義あり。今は敬慎なり。[犯忤] とは、犯し逆らうことにて、私を立てて法に背くを指す。

私さえ立てねば、心は別に相をもたぬから千変万化して跡を留めぬ。元より心は、内にあるのもな

い、外にあるのでもない、又中間にあるのでもない。実に不可思議不可商量なもので、在るかと思えば無い。無いかと思えば在る妙なる存在じゃ。然も赤来たれば赤となり、白来たれば白となり、親に向えば親となる。孝行の極じゃ。極聖極善極美なり。

如是の法は誰も造り出したものではない。自然法爾である。元来本質がそれである。我々自体がすでにそうであるから、一度自己を離れて大自然のままになってみると、本質が明了するは当然じゃ。言句の余地なしじゃ。評するれば「天真にして妙なり」、とでも言うてみるが、実は体験の世界で言うことにて、至り得た味合いは相い伝えることはできぬ。ただ本当に修して自知する以外にない。如何に法の道理が解って見たところで、ヘダテの取れた天真の妙味は知恵の想像物の計り知れるような小さな世界ではない。

しかし本来がそれであるから、悟と迷とに拘わらんのじゃ。狂人も走る不狂人も走る、走る姿は同じである。迷人もたべる悟人もたべる、その天然の妙味を知るか知らぬかで、内容に天地の差が起るじゃ。天然は不生不滅じゃ。永遠の生命じゃ。生死のまま永遠の生命なるが故に、生死に拘わらぬ。わが這裡生死なし。仏法なし。迷悟なし。庭前の竹影香し。参。

今日、悟の有無を論じ、果てには悟を否定する禅者まで出ておると聞く。哀れなことじゃ。悟りなき仏法は仏法に非ずじゃ。脱落なき打坐は仏祖正伝の打坐ではない。曹洞門下は軽く只管打坐と言うが、本当の只管打坐只管活動は、脱落して初めて可能となる重大事である。只管とは私の入る余地なき純一そのものじゃ。思量分別以前の出来事である。動静を越えたものである。

今、今に私心を入れず只あるべく修行する、つまり只管たらしめるべく只管への努力じゃ。心力を労しては只管になれないのであっても、分別するクセを破るためにはクセ以上の努力をしなければならぬ。よって只管を目標、中心として離さぬ修行、妄想に振り廻わされない修行となる。そこで菩提心の強きことが要求される。

功成って自らそのものばかりに、只あるようになるが、これは心が静まり集中したに過ぎない、けれども今がそれだけ明るくなっているから只管に近ずいていると言える。だが只管には遠して遠しじゃ。自己が切れておらぬから中心を離すと直きにそのものとヘダタる。元の黙網じゃ。大死一番してひたすら自己なきを錬らねばならぬ。思わず知らず我を忘れてそのものに徹してくる。本当に我を忘れ切った時、そのものと真に親しくなり一体となっておる確かな消息が自然にもたらされるじゃ。これを大悟と言い脱落と言う。

本来因縁無自性にして無我なることが明かになり、そのものそのまま円満具足大寂静の自覚がそれじゃ。只管がここにおいて初めて体得され、真に打坐三昧底、活動三昧底となるじゃ。本来迷も悟もな

いが、人に迷悟がある。只管に深淺はないが、人に深淺あり。故にどうしても鍊りに深淺があつて悟後の修行をやかましく言われておる。

とにかく本当に自己を忘れて脱落の確証を得るが第一じゃ。迷の世界と悟の世界は明確に異なる。その明らかな自覚を得るための修行であることを忘れるでない。至り得た人を覚者と言ひ仏と言ひ如来と言ふ。

さて悟ると言うが畢竟何を悟るのか、という課題が残る。三祖大師云く、[真を求むることを用いざれ。ただ須からく見を息むべし]と言えり。古人又云く、[別に聖解なし。ただ見を息むべし]と。本来迷悟凡聖はない。妄想もない。認むべき何ものもなきに私を立て自己を認めて真如とヘダテを作す。日々そのものと親しく照見しておるにも拘わらず、他に向つて尋ね、心平安ならずじゃ。日々時々当体全是ならざるなし、と言う確心がもてぬため即今にありながら即今を差過しておる。

自己を忘れると真如實際があらわになる。もともとこのままでよかつたのだ、と言う確信が生れる。元より何も別に悟るべきものはなかつた、と悟るのじゃ。そこに因果のまま心を動ぜざる大安住ができるじゃ。夢から覚めた時の大自覚を[悟り]と言う。その忽然と了じた一瞬の消息を、[◆地一下]と言う。

悟るとは、◆地一下を得ることと思えば間違ひはない。凡聖の明確な境が立ち、人格一変するは言を待たぬ。覚者の言々句々一挙一動はことごとく真であり実である。妄邪なきが故に。涅槃妙心滴々相承の消息は、◆地一下においてのみ存し、釈尊明星一見大悟の消息也。

今の多くの学人は初発心があやしい。本当の菩提心がないため、師の真偽を見抜く卓法眼がない。ましてやそれをよいことに、名聞利養のために学人を接するの師は、仏祖を恐れぬ大罪人と言うべき乎。先ず自ら只管打坐して脱落すべし。悟の有無を論ずる隙間はない筈じゃ。

因縁時節。寂然昭著。 因縁時節。寂然として昭著す。

細入無間。大絶方所。 細には無間に入り、大には方所を絶す。

すべて因縁果である。縁が欠けたら果を生じない。これを縁欠不生と言う。因縁所生の法とある通りじゃ。俗説に三あり、宿命説、天意説、無因偶然説、これなり。

宿命説は又運命論とも言う。悉く前世から已に定まっているので、明らめよと言う説じゃ。だからあれこれ思うてもどうにも成らぬ故、今今己れの分に安住して只やれよ、と解すれば一面生きてくる。然し進歩発展開拓努力の余地がない。印度の亡びしもこれに依ると言うた人がある。そうかも知れぬ。天意

説は又神意説とも言う。この世界は神によって作られ、苦も楽も皆神意に依る故に、それに服従して行くより外に道はないし、素直に服することこそ神の意志を反映することになる、と言う説じゃ。無因偶然説は字の通りじゃ。われわれの日常行為の事柄は、何もそうなるべき定まった原因があるのではなく、畢竟偶然のでき事である、との説じゃ。

三説いづれも思考一般常識のものなるが故に、又大きな欠点も避けられない。心眼のないというものは、知識と思考と判断それに意志の枠内限りである。自我にくくられたこれらが真実に則して働く筈はない。善悪の規準が先づ立たぬため、秩序がない。自然矛盾だらけとなる。理想が低く平等な大安楽と、それに至る方法論がない。それ故に釈尊は、何れも人生に害あって、益なしとして退けられた。

因縁説が仏説じゃ。今、現実のこのままにおいて、自由と理想と秩序と平和と活力等、満々としておるを発見したは、正に大恩教主南無釈迦牟尼仏である。合掌

真実は向うにあるのでもない、こちらにあるのでもない、亦中間に存するのでもない。つまり求めて得られるものは、又失うことにもなり、真実ではないのじゃ。こうなると畢竟如何ともすることができぬではないか。左様、求めねば得られぬし、求めては得られぬ。諸人如何となす、速かに言え。徳山云く、[道い得るも三十棒、道い得ざるも三十棒]。古人云く、[只凡情を尽せ。別に聖解無し]、とのたもうた。

凡情とは自己じゃ。只管打坐して自己を殺せとなり。自己なき時自己ならざるなし。天地間他己の身心じゃ。悉く真なれば別に真とすべきなし。九九元来八十一。

ここに[因縁時節]とある。時節はいつも時節じゃ。時ならぬ時はない。事は因縁果じゃ。種をまかねば実はのらぬ。されば桃栗三年柿八年。無自性空故に因縁所生の法じゃ。因縁が異れば時節も異なるじゃ。異なる姿は千変万様となり、世界を莊嚴しておる。千変万様に異なればこそ、箇々独立にて他に犯されざる尊嚴がある。差別ながら絶対平等じゃ。

とにかく只管にやっておれば、必ず脱落する時節がある。時の長短を見ずに自己なくやれば自然に熟して落ちるじゃ。千年の暗室も白日の如く、明々白々として疑議あることなしじゃ。手探りの愚はやらぬ。古来よりちゃんとその通り、千年先きも是の如しじゃ。迷いようがない。[寂然として昭著す]と洞山大師脱落の様子を示された。

無我の働きをちょっと言うてみると、[細には無間に入り、大には方所を絶す]じゃとなり。細となると間の無いところに入る程細いじゃ。大は又四方極まる所がないとなり。共に計り知ることはできぬなり。極小は極大に同じく、極大極小共に無きが如しじゃ。

自己なければ、見聞覚知に着していちいち比較計量しない。時々大円成である。所々無限である。無限

の安住力じゃ。我等が元々その存在なれども、自らへダテをなして道に背くがために暗黒となるじゃ。ほんの少しのへダテでも真実一体にはなれぬ故、そのものの真相は解らぬ。やはり暗中模索、思量分別して手探りの愚はまぬがれぬ。

憶測妄想して心平安ならざりしを如何せん。本当に修して真箇脱体現成しなければ、いつまでも苦海にさまようじゃ。たった一つの自己が大変なのだ、一念万念となり、すべてとなって天地の差をなす。だから次に説かれておるのがそれじゃ。容易の看をなす勿れとの意じゃ。

毫忽之差。不応律呂。毫忽の差い、律呂に応ぜず。

今有頓漸。縁立宗趣。今頓漸あり。宗趣を立するによって、

〔毫忽の差い〕とは実に微細な差を言う。蚕の吐く糸の一筋がそれじゃ。それを十本あつめたものを一絲といい、これを十集したものを毫と言う。極わづかなことを指す。

われわれの念がワズカでもそうたら、大変なことになる。一念というものは実に恐ろしいものであるぞ、と注意されたのじゃ。修行はこの一念の性体を解決するのであるから、念の生づる根本に注意しておらねばならぬ。念として生じたものは影じゃから、それをどんなに解明しようとしても何んにもない。生滅は一瞬じゃ。心の生づる本を知るのであるから、今一瞬の、六根六境見聞覚知として分化出現してないところに、身も心もあづけ切るのじゃ。天地とわれと同根、万物一体の世界じゃ。念の念とすべきなく、心の心とすべきなきが故に、無念と言い無心と言う。未だかつて名を知らずじゃ。かつては自我であったが今度は大光明となって世を照し人を救うじゃ。

念なき只管に徹し切れよ、さもないと本当に自分が満足することがないぞと、いうことじゃ。そこを、〔律呂に応ぜず〕と形容して示された。〔律呂〕というのは支那の音楽言葉にて、六律六呂と十二ある、音楽の調子じゃ。調子が合わねば満足はいく音色にはならぬところから、法に引用したものじゃ。世界は律呂だ、私が少しでも立つと音は騒音となる。調子は一切即一、一即一切の妙音でなければならぬ。

〔徳あって知なければ、人服せず。知あって徳なければ、人敬せず〕とある。知徳共に備わって人の上に立つ時、調子は自から整うものじゃ。

へダテを取る道が二つある。即ち頓漸の二教がそれじゃ。頓は一心を究めて成仏する。一超直入如来地

なり。迷うは只自ら迷う故に、迷う心を解決すれば足れりじゃ。達磨云く、「心を言い以ち来たれ。汝がために安ぜん」、と。二祖良久して云く、「心を求むるに終に不可得」と。心とすべきものが無いということが解れば、迷とすべきものも苦とすべきものも無いであろう。始めから何んにも無いではないか、そのことを体得すればよいのだぞと、言うのが頓教の禅である。

一方、人には深淺利鈍があり執着心もそれぞれ形が異なる。自分の執着心を一つ一つ捨ててゆく段階的方法を漸教の禅と言うておる。〔今頓漸あり。宗趣を立するによって〕と後に続くのであるが、心に段階はない、又これからという時もない。今はいつも今である。今を本当に体得するための修行である。

今と言ういまなる時はなかりけり

まの時くれればいの時は去る 参じて知れ。

実相には宗趣などない、今は何ものも認め入る隙間はない。宗趣を立てるは自我凡悩を立てておることを知らねばならぬ。頓じゃの漸じゃの言ういとまが何処にある。

宗趣分矣。即是規矩。宗趣分る。即ち是れ規矩なり。

宗通趣極。真常流注。宗通じ趣極まるも、真常流注。

思い思いに宗趣を立てれば、幾つにも分れる。〔宗趣分る〕とある通りじゃ。元来立てることができないので、名も付けられぬ。仮に心といい、無相と言い、仏と言い、如来と言うてみるに過ぎない。

にも拘わらず頓がよい漸がよいなどと、自分で極まりをつけてしまう。それはよろしくないぞ、と注意されたのが、〔即ち是れ規矩なり〕。正法にキズを付けておる、と言う意なり。

だから如何にその宗趣に通達し、極めてみても、始めから自己を立てておるから、真実の道ではないぞとなり。〔宗通じ趣極まるも、真常流注〕と言うておる。〔真常〕というは一見いいようにも見えるがそうではない。元来真偽を越えておる。真として認むべきなし。〔常〕はツネじゃ。定まり固定したる意にて、真を認めたる意識の流注であるぞと教示された。〔流注〕は流れ注ぐ、意識の文彩じゃ。

外寂内搖。繫駒伏鼠。外寂に内搖くは、繫げる駒伏せる鼠。

先聖悲之。為法檀度。先聖之れを悲しんで、法の檀度と為る。

つまり悟りの格に入って格に執したる意である。悟りも認めたら迷いじゃ。凡悩を以つのも悟りを以つのも、真実に背いたるは同罪じゃ。如何に宗通じ趣を極めても、認めたるは自我が残っておる証拠である。もう一つ大きく破らねばならぬ一物がある。ちょうどユリの皮を全部取るとどうじゃ。何も無い、その何も無いというものも取らねば真如ではない。裸をもう一つ裸にする。そこで次の句が出てくる。

〔外寂に内揺くは、つなげる駒伏せる鼠〕である。外見は落ち着き払って、生死凡悩名誉俗欲を超越したるかに見ゆれども、心は穏かならずして、名聞利養の凡悩がチラチラ動くじゃ。

一応宗に通じ趣を極めたるによって、心の空なること、物の空なること、今しかないことも解っておる故に、凡悩の空なることも知っておる。道の確あらねばならぬことも道理ではよく解っておる。解っておることと、体得したことは無関係じゃ。名聞利養の心がチラチラしても、道理が解っておる故押えることはできる。あたかも繋がれた駒の如く、ザルに伏せられ捕えられた鼠の様にその内で騒ぎ廻る。これを獅子心中の虫と言うのじゃ。

これらの禅病は古来から多い。一口に言えば只管の錬りが足らぬ、畢竟菩提心が弱いからだ。只管工夫は口では言えども実地はなかなか容易ではない。自己を超越することは万事を超越することである、そうなまやさしいものであろう筈がない。

宗に通じても通じなくても、只管の一条鉄しかない。瞬時の世界故に、一瞬の油断なく今今に満身を放ち入れて只やる。法を思い道を思うの切なれば、名聞利養に走られようか。皆店出しが早い。只管にそのようなものがあるか、聞かまほし。〔先聖之れを悲しんで、法の檀度となる〕と仏祖方が正法を思い、真箇の那一人打出を思うと、学人の菩提心にぶきが故を悲しまれておるじゃ。

何が一番悲しいかと言えば、菩提心の無いことである。法を思い道を思い古仏を思い、ひたすら真実の人たらんと努力することである。菩提心なき者の法は、私法となり汚れておる自己満足のための法じゃ。法我見の取れ難きは祖師方の最も心をくだかれ教示されておる処である。とにかく只管でブチ切れブチ切れ。菩提心、菩提心。

隨其顛倒。以緇為素。其の顛倒に随って、緇を以って素と為す。

顛倒想滅。肯心自許。顛倒想滅すれば、肯心自ら許す。

何もなきに、自己があるように思うておる。ほんの少しでも念が添うと事物にくくられて不自由至極じゃ。そこに不平不足が出て、本来の全体現成の自由さが殺されてしまう。認めた瞬間に真実が汚れてヘダタるじゃ。

これを顛倒妄想と言うじゃ。衆生と思えばよい。悟りなぞなきに悟りを求むるは、無人島にて人を探して終に一生棒に振るが如きの愚にあらずや。なにもないのじゃ、という体験が脱落である。確証である。無我の実証と言うても同じ。元来迷うてはおらなかつた、只認めて心に留むるが故に顛倒妄想して迷うておると思うていたことに気が付けば、もうしめたものじゃ。

しかし、そうなるためには正師の悪辣の手段にかからねばならぬ。殺し切つて真に生かすは、よく正師

の鉗鎚による。〔顛倒〕は自己なり。自己を捨つるの鉗鎚なれども、坐禪に師はない。坐禪の師は坐禪である。只坐禪をすれば、坐禪が坐禪の真相を教えてくれる。本当の悪辣の手段は、自ら法のために身を忘れて打坐一枚にて日を過すこと最上なり。師は道しるべと思えばよい。

世の中は皆顛倒である。四顛倒その代表じゃ。四とは常楽我浄を指してすべてを言うておる。無常を常と思ひ、苦楽はないのに楽を求め、無我の身を我と執着し、浄不浄はないのに浄だと思ふ。自己を認めれば四顛倒となるから、人々の上に手段方法が必用となる。〔其の顛倒に随って、緇を以って素となす〕と言われた。〔緇〕は黒じゃ。〔素〕は白である。我を捨てさすための活手段を言う。

思量分別では解らぬじゃ。思量分別妄想を出さしめて、それを尽し切らしむるの法剣である。知恵では解らぬように出来ておるじゃ。それにひっかかれば自己がある。顛倒を起こす。ところが脱落すると、どうしても黒より白いものはないじゃ。〔山是れ山にあらず、是れを山と言う〕と古人が言うた。汝の頭べを切断し去れ。忽念として自己を忘るであらう。〔顛倒想滅〕の時節あるを疑わぬ。無字も隻手の声も確かに解った。日々時々道ならぬはない、と言われしも手に入った。気にかかるものはなにもない。見ても聞いてもいちいちよく切れる。生も切れる、死も切れるじゃ。

ここぞ正しく大悟の境地、我れ確かに得せりと、〔肯心自ら許す〕。洞山大師かつて自分も覚えがある。無情説法の話で気がついた。◆山の処で始まった無情説法の話は、そこでは自己を忘るに至らず、◆山を辞して雲巖に参ず。どうしても忘れられず、◆山の処でかわした問話を正直に話した。道を重くする人は道の人を重く聞く。師の言が釈然としなければ気にかかるじゃ。洞山だけのことではない。道の人皆そうじゃ。

道のために訪うて他なし、早速無情説法に及ぶ。◆山は◆仰宗の開山じゃ。名うての老将である。その向こうをはっておったのが雲巖じゃ。今聞いた◆山の始終を今一度試みた。果せるかな機縁熟し自己を忘じた。偈を述べて云く、〔也大奇也大奇。無情説法不思議。若将耳聴終難会。眼処聞時方得知〕。重擔一時に降りて一応ここでけりが付いたかに見えた。自己を忘じた消息は認めざるを得ないのじゃ。自己が無いという見知まで否定してしまうと法が伝わらぬ。だが何も無いと言うものが残っている限り真の仏法ではない。師の雲巖は見知の覚証を認めながら、余習未だありとして全分を許さなかった。師に一応許されたら学人はそこで腰を下ろし、肯心自ら許すものだ。ところが師を信じている限り、見知の自信はあっても残り物が日常に邪魔をしてすっきりしないものじゃ。洞山も又菩提心重きが幸いして、心底すっかりこれでよしとせず、愈々如法に鍊ったところが偉い。

只管の一条鉄にゆかぬことに気が付いて洞山大師は一層只管を鍊ったのじゃ。菩提心の有難たいところ

は、道を益々道たらしめんとするじゃ。脱落のまゝ、時々道そのまゝでなければならぬ。悟りを認めたり脱落をもったら動きがとれぬ。一時の鑑覚を鏡にして引き延ばすと一生大法に生まれる事はできぬぞ。裸をもう一つ裸にするのじゃ。只管で只管を殺すのじゃ。ここが言いたかったのじゃ。只管が手に入った処で、それを悟りと思うな、只管で只管を殺ろし切った時、本来の消息を大悟するぞとなり。後河を渡るの因み、この玄旨を大悟し、師われを欺むかざりしを了得したのじゃ。有名な過水の偈はこの時述されたじゃ。洞山はここにおいて真にホゾ落ちした。〔肯心自ら許す〕ことができた。この語は、自ら許してはならぬと、向上心を促しながら、真に肯心自ら許すことのできるまで只管を錬れという意も含んでおる。そこで次の語あり。

要合古轍。請觀前古。古轍に合わんと要せば、請う前古を觀ぜよ。

佛道垂成。十劫觀樹。佛道を成ずるに垂んとして、十劫樹を觀ず。

古への人の踏みけん古道も

荒れにけるかも行く人なしに

良寛和尚の歌である。〔古轍〕とは釈尊より単伝せる涅槃妙心の消息を言う。祖師方と思えばよい。古人の如くあるためには、古人の如くやらねばならぬ。何人か古人に非ざると、深く脚下を照顧せよ。古今は脚下に有り。直に古人の復活底じゃ。知らねばならぬ一大事なり。

脚下はいつも脚下ではないか。エマーソンは、〔汝等労働せよ。且つ信ぜよ。且つ自由なれ〕と言った。労働そのものが無限の力である。神聖である。自己なければなり。その労働をさせて貰うということが恩恵である。救いである。おのおのの境遇事柄に純一になればよい。つまり只管じゃ。大燈国師の垂戒に、〔無理会の処に向かつて究め来り究め去るべし〕とある。〔古轍に合わんと要せば、請う前古を觀ぜよ〕じゃ。自分流の修行はよくないぞ、古人のお示し通り、行裡の通りやれよということじゃ。仏が我等に〔請う〕と申されし因縁を深く思え。古人は成來の仏であり我等は當來の仏じゃ。仏の生ぶ声を発しようとしておるこれからの仏じゃ。敬せざるを得なんだからじゃ。願いであり祈りであり仏同志の契りである。勿体ないことである。

何故に〔請う〕とまで言うたかとなれば、如何に菩提心切実であっても、その打坐が悟ってやろうなどと、そのものを無視して悟りを相手にしていたら、万劫に成仏することができないからである。これを、〔仏道を成ずるに垂んとして、十劫樹を觀ず〕と言うて注意された。

『法華經』に、大通智勝仏が十劫もの長い間坐禅しても仏法不現前であった、という因縁話を借りて

きたのじゃ。坐禅の時は坐禅がすべてである。坐禅が宇宙である、坐禅に坐せしめられた時、宇宙の坐禅と現成する。仏を認むるに処なけん。参。

〔垂〕はなんなんと訓ず、大地の遠く果てしなき極わのたれ下りたる様とある。遠く永い間ということじゃ。〔樹を観ず〕とは釈尊が樹下石上で坐禅されたことにより、坐禅の意じゃ。〔観〕は観察の如く、自己の側からながめる故に、今は智勝仏によく利いておる。自己を忘れることは万劫に不可能たるは気の毒なことじゃ。只坐禅すればよいものを。

如虎之欠。如馬之◆。虎の欠けたるが如く、馬の◆の如し。

以有下劣。宝几珍御。下劣あるを以って、宝几珍御。

以有驚異。狸奴白◆。驚異あるを以って、狸奴白◆。

これも前の句に照応したもので、余計なものがあるからよろしくないぞと言う意である。虎は人を食う毎に耳が欠けるといわれておる、欠目の数で人を食うた分が直ぐに解るというものじゃ。元来からの無傷無染汚の見事さには遠く及ばぬ。その傷を見て、他の虎が気色悪がり寄りつかぬ。

〔馬の◆の如し〕とあるも同じなり。又〔夜目〕とも言う、よめと、どちらも訓ずる。馬の前足の膝上に白毛があつて夜光るといふ。どんなに隠れても発見され、射殺されるじゃ。

一見自分を売るにはよいが、それだけ危険な一物をさげているがために、自他を越えた入我我入の自在力がない。どんなに素晴らしい境地であろうとも、それを心に留めたら、先ず先きに留むる自己があることを知れ。自己は我見じゃ。真空ではない。無病の病いが一番恐ろしい。無我也、以ったら有我じゃ。無我は無我もない。ないもないじゃ。そこで次の句がでてきた。

〔下劣あるを以って、宝几珍御〕。『法華経』からの比喻じゃ。長者の一子が下劣の身となってなかなか自分がそのような御家柄の子とは信じない、そこで父親が説得するに先ず相手を驚異させぬために

〔宝几珍御〕等を捨てて、下賤の身に落として近づき、徐々に引き立てて元の家敷に戻ったという。

〔狸奴〕は猫なり、〔白◆〕は牛じゃ。下等を代表して言うたじゃ。

もとより真如法界のわが家じゃ。捨てるものも得べきものもない。無明のために真空の実相が解らない。自ら下賤だと思ったり、脱落を認めて宝几珍御となし、他をつまらぬ徒輩の如く思う程、心に留めてしまうと先入主となるじゃ。それが始めからそれじゃったと知るだけであるが、その体得は菩血提涙を流して始めて可なり。知解商量する作用や機能が悪いのではない。その性体を知れば光明となる大事な力である。ところが自我が心の主となっておる限り、自己の知解商量としかならず、知解商量の限り

の自己に限定され、共に不自由にして苦の種となる。そこで暫く分別思量を問題にしない、つまりもちいないようにして今今、単単として道のままにやるじゃ。そうしないと道に合致する時節がない。道は真実の道じゃ。常にいっぱいいっぱいじゃ。限りがないじゃ。限りなき働きをせにやならぬ様になっておるのがわれわれの心じゃ。知解商量もそうであるが、ヘダテのとれたる上は仏の知恵と言うじゃ。固りがないから限りがない。本来がそうである。只自己あるがためにヘダタって自分に気づかぬだけである。

そう言われ教えられても、それが仏の言であっても、あまりに尊く素晴らしいので、そんな夢みたいな寝言みたいな話があるものか、と驚き怪しむじゃ。哀れも愚に似たり。天井裏の鼠ばかり捕えて喰うようでは、御膳にごちそうを盛られて進められると、反って驚き怪しむに非ずや。自ら凡夫などと思うは仏を殺す大罪人と知れ。本来本法性、天然自性身の前に何と言ひ訳けすじゃ。〔驚異あるを以って、狸奴白◆〕などと言わしむること勿れ。少しの残りものが在っても〔狸奴白◆〕となるを知れば、悟後の修行も容易なことではないのじゃ。我が少林◆隠老漢も、〔口辺白◆を生ず〕と言われた。何も言うことがなくなって、口の廻りにカビが生じたとの意である。

達磨云く、〔唱道の者は多く、行道の者は少し〕と。昔も今も同じことじゃ。

◆以巧力。射中百歩。◆は巧力を以って、射て百歩に中つ。

箭鋒相値。巧力何預。箭鋒相値う、巧力なんぞ預らん。

木人方歌。石女起舞。木人まさに歌い、石女起って舞う。

非情識到。寧容思慮。情識の到るに非ず、むしろ思慮を容れんや。

修行は只、自我を殺すにあり。殺す自我などないぞ、などと言うはそれだけ自我あるを告白しておるのじゃ。聞くそのものとヘダテがなければ、つまり只管にあれば自ら理屈はない。認めなければ捨てる用もない。あるがままじゃ。ここから本当の工夫となる。工夫なき工夫を真の工夫と言う。又、〔別に工夫なし〕と古人も言うた。

本来本法性であっても、自我を認むるに依って無明となる、それがそれと解らぬじゃ。無明とすべきものは実はなんにもない、しかし認めるクセは即ヘダテとなるので、いち応事わけをしておく必要がある。ヘダテを無明と思えばよい。そのもとは自我じゃ。

先決は自我を忘るる事じゃ。認識以前じゃ。煩惱菩提の生ずる以前の様子である。ここを只管として鍊るのじゃ。始めからその通りには行かぬ。そこで殊更に真剣に取り組んでやるのを修行と言うておる。どうしても始めは煩惱との戦いじゃ。道が勝つか煩惱に敗れるか菩提心で勝負じゃ。煩惱が出れば捨て、出れば捨てて即念に只在るよう今を護るのじゃ。今が護れるようになると、煩惱の出る隙間がなくなる。修証不二と現成してくるじゃ。これだけでも大きな救いとなっておるが、クセが切れておらぬから少しのことで直ぐに波風が立つじゃ。これからが本当の正修行である。

弓の名人の◆は、百歩先の柳の葉を射て百発百中じゃ。修行功勳のたまものじゃ。何事も始めからそうはゆかぬ。やれば誰れでもやれる。修行を純熟せしむるは本人の菩提心一つじゃ。それを今、[◆は巧力を以って、射て百歩に中つ] と言うた。しかしこれも未だ充分ではないぞ。次をよく看よ、となり。

[箭鋒相い値う、巧力何んぞ預からん]。さあ、どうじゃ、何を修行すると言うのじゃ。見聞覚知日用の起居動作、若し[巧力]によらなければできないとなると、宇宙の運行、春夏秋冬から行雲流水に至るまで修行して、その[巧力]で行わねばならぬぞ。生れるのも死ぬのも又そうじゃ。元古仏云く、[道本円通争假修證。宗乘自在何費功夫]とある如く、そのような作為のつけ入る隙間は微もない。元来退く後ろも進むべき前もないぞ。認むべき自己も他己もない。分別も分別ながら意はない。さあ諸人、修行して何をかなす。[只凡情を尽せ、別に聖解なし]。如浄古仏云く、[坐禅を坐禅と知る者稀なり]と。

坐禅の時は坐禅ばかりじゃ。これが仏よ。これが宗旨よ。これを如是の法と言うじゃ。坐らぬ者には解らぬこと、一寸坐れば一寸の仏と言う意も、ここいらで解ったろう。

因みに、[箭鋒相い値う]の古事というのは、飛衛と紀昌の弓の名人が居た、互いを射た矢が途中で当たった。箭鋒相い値うは世間においては妙技の極じゃ。坐禅の力はそればかりか、時々それである。喫茶喫飯、巧力を要するや否や。人人子細に参究し去れ。

一度は徹底死に切らねばならぬ。自己を忘れてクセの根を切るのじゃ。一旦は木石になってなを只管を鍊るのじゃ。死に切ったものをも殺し尽した時、再び生き返る。大悟の境界じゃ。その様子をうまく、[木人まさに歌い、石女起って舞う]と言われた。自由自在じゃ。身心脱落がそのまま脱落身心として差別のままに活動してくる。歌うも舞うも法の声。[情識の到るに非ず、むしろ思慮を容れんや]じゃ。絶言絶慮かえって合答。真空妙有の意じゃ。皆始めからそうで、特別なことではないぞ。心の性体を究めればすべて明白じゃ。自分の顔を自分で確かめるじゃ。そうだったのか、と得心すじゃ。疑心の生ずる余地なし。思い煩うことがなくなったらどうなるかと申せば、次を見るべし。

臣奉於君。子順於父。臣は君に奉し、子は父に順ず。

不順不孝。不奉非輔。順ぜざれば孝にあらず、奉せざれば輔に非ず。

仏に遇えば仏となり、父に会えば父となり、君に遇えば君となり、子に逢えば子となる。誠の働きじゃ。一つ心が縁に応じて発動する。天心の妙用と言うはおおいに当れりじゃ。何んの巧力も要らぬ。ことごとく会えばそれじゃ。為せばそれじゃ。それを思えば此処に在り。

私がないければ縁の丸ごとである。大愛湧出して極まりなしじゃ。親しさの極である。自分である。愛せざるを得ぬ、敬せざるを得ぬじゃ。どうして戦争が起せようか。自我を満たすは破滅の縁である。自然破壊のできぬところである。

今や忠孝についてやかましい。平和を叫ぶ時、平和はなしとかや。相を認めた忠孝は必ず矛盾を生ずる、自我より出ているからじゃ。私の取れた真空妙有の働きはとても情識で計量することはできぬ。宇宙の作用天然の働きだからじゃ。それが実相であり、徹底真であり善である。真心のことと思えばよい。道はまことなり、誠なり信なり愛なりじゃ。忠孝は自然のすがたに非ずや。

自我中心で顛倒妄想すれば、本来の自分がどんなものやら解らぬし、忠孝の真相も到底解りはせぬ。何を云い出すか分ったものではない。無明なるが故じゃ。彼の罪ではない。

それを本当に知らしめ、救い尽して彼に大歡喜大安心をもたらすは、この仏祖正伝の只管打坐しかないじゃ。理想実現の道である。只坐禅すればよい。只活動すればよい。一切の理屈を忘れて只坐ればよい。只とは純一にして無雑じゃ。雑念妄想の入る隙間なしじゃ。道元禅師曰く、[心意識の運轉をやめ、念想観の測量をやめ]と言われたところである。純一にならないと念が飛び出しそのものを分からなくしてしまう。隔てじゃ。隔てが有っては自己を空じるとはとても無理じゃ。ここが修行の急所である。純一なれば念は自ずから無い。本来そのものばかりにして自己など無いじゃ。だから無自性空と言う。元来無自性空であるから別に求めるものも無いじゃ。坐禅をして何をか求む。只、法の為に打坐せよ。坐禅の法は坐禅である。法は今じゃ。大法をひたすら重くすれば菩提心自ら健固となるじゃ。いつの間にか私がとろけて落ちる。今今単単とやるのじゃ。人を見ず他を見ず相手を見ず、自分も見ず仏も見ず修行も見ず、只やるばかりじゃ。その姿はあたかも次の様に見ゆるじゃ。

潜行密用。如愚如魯。潜行密用は、愚の如く魯の如し。

只能相續。名主中主。只能く相續するを、主中の主と名づく。

法が重くなれば私がなくなる。今しかなくなる。思うことも、話すこともなくなって、只黙々とある。人を見ても人とも思わず、楽に会うても楽と思わず苦に在っても苦とも思わぬ。道に任せ縁に任せて只是の如しじゃ。〔君子は盛徳あって、容貌愚なるが如し〕、とある。一見馬鹿に見ゆれども、なかなかどうして、その身の軽やかさと何も無い落着きは尋常ではない、どことなしに犯し難いものがあるぞと、洞山大師は言いたげじゃ。

〔潜行密用〕は指標でありその如く修してやらねばならぬ。しかし容易なことではない。一隻眼具した力がなければ難しいことじゃ。だが今、その事に徹してやることに変りはないじゃ。道を道たらしむるの修行であれば、只自己の縁に任せて成り切り成り切りやるばかりじゃ。〔潜行〕とて隠れて行ずるに非ず。尋常普通の人では即今を差過して、眼が届かないじゃ。深く注意して私なく如法に任せてやる意である。あたかも法の真只中に潜行するを形容したものじゃ。

〔密用〕は綿々密々で、切れ目なく只管を鍊るを言う。つまり馬鹿になる修行である。賢い人が馬鹿になることは難中の難じゃ。何も彼も捨て尽し、忘れ尽して只只やるばかりじゃ。〔愚〕も〔魯〕も鈍重じゃ、馬鹿じゃ。聖解が有るのなれば、知識の商量で知ることができるし、伝えることもできる。それも何も無い真相を伝えようとするには、何も彼も捨て尽し馬鹿になって始めて不伝の妙法であることが解る。自ら那一人となるより道はないのじゃ。

そこが最後の句じゃ。〔只能く相續する〕ことが一大事因縁なのじゃ。どの手にしても釈迦牟尼仏の暖皮肉を地上に存続せしめねばならぬ。始中終重ねて言う如く、暖皮肉とは一見明星で時節因縁が純熟し、大悟徹底した涅槃妙心を伝えることじゃ。如何にして伝え得べきや。やはり大悟の消息、即ち◆地一下の体得にあるのみじゃ。

◆地一下が何故にそれ程大事なことかと言うならば、釈尊その始め四苦に取りつかれ、思い煩うて、他にまぎらわすものなきにまで苦しまれた。ついに城を抜け出られ出家に身を預けて修行に打ち込んだ。つまり大聖釈尊も始めはわれ等と少しも違わぬ赤凡夫であったのじゃ。見聞覚知するところの諸々の作用も今のわれ等と少しも異なることはなかった。

ところが一つだけ大きく違うところがあった。それは不退転の求道心、即ち菩提心が強かったという点である。城を捨てると言うことは、最高の地位と名誉と一切の財、それに家族子供への情愛をも切り捨てた道念ということである。この道念あれば凡情の尽せぬ筈がないのじゃ。それでも樹下石上正身端坐

すること六年じゃ。坐に坐せられて徹底自己を忘じた。具に万縁万境一時に坐断したのじゃ。しかしまだこの時は何んの決することもなく、大宇宙と全く融合し、真空の実相、因縁無自性因果無人のまま気がついていなかったのじゃ。

十二月八日の朝まだき、明星一見の縁によって忽然としてわれに返って驚かれたのじゃ。見聞覚知のまま、一切の障りがなく、すべては本より整然としていたことに気が付かれ、心の認むべきものもなんにもなかったのじゃ。元来迷うてもいなかったし、苦んでいたのも、すべて自身の思い、自我の邪思惟によるものであったことを確かに知られたのじゃ。

真実に目覚められ、へダテの取れた確かなアカシが [◆地一下] の大事件じゃ。自分の本性に気がつかれ、すっかり得心して大安住したは [◆地一下] 自我が確かに切れ落ちた脱落の一件に依るのじゃ。千年の暗室が白日にさらされた明白な事実じゃ。誰が何んと言っても疑う余地なき真実の世界である。

見よ、◆地一下なくんば悉く夢中の夢、覚中の夢は悉く覚なることを知れ。元古仏云く、[謂ゆる諸仏とは釈迦牟尼仏なり。釈迦牟尼仏是れ即心是仏なり。過去現在未来の諸仏共に仏と成る時は必ず釈迦牟尼仏となるなり] と。涅槃妙心に二つはない。時に過現未あるとも今はいつも今じゃ。人はいつも人じゃ。因果は常に円万具足して余物なし。因果に成り切って自己を忘じた脱落の消息は、釈尊大悟の事実と同事同性故に、釈迦牟尼仏じゃ。宇宙の主人公である。歴代の祖師、皆◆地一下によって釈尊の消息を単伝し来ったのじゃ。感情や理会では始末の付かぬやつじゃ。大事な事は確かにそうだという正師の証明がなければならぬ。玉石混合の危険があるからじゃ。世に言う [面受面稟] の一大事である。

嫡々相承の消息である真箇の嗣法が [◆地一下] じゃが、それを証明してくれる正師の元で研参することが最も肝心なのじゃ。とにかく真箇に自己を忘ずることである。真箇の菩提心である。

遠く二千五百余年前にその源を発し、累々として等しく釈尊の妙心を相続し来ったことは正に驚くべし。なんと尊いことではないか。この仏恩に報じんとならば、伝えて邪なき只管打坐して脱落せよ。◆地一下が、古人われを欺かざりしことを証するであろう。菩提心は能く菩提心に通ず、感応同交するを疑わぬ。

洞山大師云く、[只能く相続するを、主中の主と名づく] と。諸人洞山大師の再来人となって世の涼蔭樹たれかしと祈るのみなり。これ仏祖の大悲願なり。至禱 至禱。

平成七年六月十五日 初版第一刷発行

著者 井上義光

発行責任者 井上希道

発行所 少林窟道場

広島県竹原市忠海町